

エレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルト  
『最期の抱擁』における日本  
—20世紀初頭のフランス文学におけるジャポニズムの変容 ①—

中 島 淑 恵

富山大学人文学部紀要第58号抜刷

2013年2月

# エレヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルト 『最期の抱擁』における日本

—20世紀初頭のフランス文学におけるジャポニズムの変容 ①—

中 島 淑 恵

## はじめに

エレヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルト（1863-1947、正式の名はHélène Betty Louise Caroline de Zuylen de Nyevelt de Haar）は、父方・母方ともにロスチャイルドの流れをくみ、1887年、24歳でエティエンヌ・ヴァン・ジュイレン・ヴァン・ニーヴェルト男爵のもとに嫁ぎ二児の母となるも、1901年以降ルネ・ヴィヴィアンと急速に親交を深め、社交界ではその豊かな容姿からブリオッシュの異名をとった貴婦人である<sup>1)</sup>。

ヴィヴィアンとの関係は、慈愛に満ちた母のような愛情を注ぐ保護者であったとも、嫉妬に狂うサディスティックな束縛者であったともいわれているが、ヴィヴィアンの文筆活動がもっとも旺盛であった時期に寄り添い、その最期を看取った後に、かの女性詩人の墓にネオ・ゴシック様式の瀟洒な霊廟を贈ったことでも知られている。ジュイレン自身もまたサッフオの園の住人であり、ヴィヴィアンの他ナタリー・クリフォード＝バーネイらとも関係があったとされるが、大きな文学上の影響を相互に及ぼし合った相手としては、やはりヴィヴィアンのみはその文筆活動において重要な役割を果たしたことは明白である。

1903年から1904年にかけて、ジュイレンはヴィヴィアンと共同の筆名であるポール・リヴェルスダール（Paule Riversdale）の名で、韻文詩集『愛の方へ』（*Vers l'amour*, Maison des Poètes, 1903）と『木魂と反映』（*Échos et reflets*, Alphonse Lemerre, 1903）、中篇小説『二重の存在』（*L'Être double*, Alphonse Lemerre, 1904）と掌篇小説集『根付』（*Netsuké*, Alphonse Lemerre, 1904）を発表している。このうち、いずれも1904年に発表された『二重の存在』と『根付』について、日本の文化が様々なかたちで反映されている事実を筆者はこれまでに指摘してきた<sup>2)</sup>が、小論は、その延長線上にあるものと考えられるジュイレン自身の名で発表された作品において、日本なるものがどのような影響を及ぼしているかについて論考を試みるものである。

## 第1章 ジュイレンの著作について

これらポール・リヴェルスダールの名で発表された4作のほかに、エレヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルトの名で発表された作品としては以下のものがある。

1. 『落葉』 (*Effeuillements*, Alphonse Lemerre, 1904) 韻文詩集
2. 『おが屑』 (*Copeaux*, Alphonse Lemerre, 1904) 掌篇小説集
3. 『あり得ない誠実さ』 (*L'Impossible Sincérité*, Calmann Lévy, 1905) 小説
4. 『思い出の道』 (*Le Chemin du souvenir*; F. Juven, 1907) 小説
5. 『忘れ得ぬ女』 (*L'Inoubliée*, E. Sansot, 1910) 掌篇小説集
6. 『最期の抱擁』 (*La Dernière Étreinte*, Alphonse Lemerre, 1912) 小説
7. 『誘惑者』 (*L'Enjôleuse*, Alphonse Lemerre, 1914) 小説

この他に戯曲作品として、パリのグラン・ギニョル座で、1905年6月19日に初演された『中絶された仮面舞踏会』 (*La Mascarade interrompue*)と、1905年12月11日に同じくパリのフランス自動車クラブ劇場で初演された『とある庭での喜劇』 (*Comédie dans un jardin*)、初演記録は不明であるが、『あり得ない誠実さ』から翻案され1908年に発表された四幕物の『ベリル』がある。

また、出版記録という点から見ると、1909年に『サッフォと8人のギリシア女流詩人』 (*Sappho et huit poétesses grecques*) がジュイレンの名で発表されているが、これはヴィヴィアンが1904年に『レ・キタレーデス』 (*Les Kitarèdes*)の中に含む形で韻文で発表したサッフォ以下のギリシア女流詩人の作品の散文訳であり、おそらくはヴィヴィアンの筆になるものを、ジュイレンがいわば喪の作業の一環として出版したものではないかと思われる。

このようにジュイレンの筆業の成果を俯瞰してみると、ポール・リヴェルスダール名で発表された作品を含めれば、1903年、40歳にして突如として創作活動を始め、その作品の多くは象徴派の作品を手掛けたアルフォンス・ルメール社から出版されていること、1914年を最後に作品は発表されていないことが分かる。このことから、ジュイレンの作品群はヴィヴィアンの強い影響下に創作された可能性が高く、ヴィヴィアンの没した1909年以降の作品にもそれは反映されていると考えて差支えないだろう。また、おそらく筆業への興味は1914年以降急速に薄れ、ジュイレンの関心は別の領域に向かって行ったものであろうと思われる。

小論では、このうち日本に関する記述が物語の進行上重要な役割を果たしているものと考えられる小説『最期の抱擁』について、その詳細を検証しようとするものである。この作品はポール・リヴェルスダール名で発表され、同じく日本に関する記述が物語の進行上重要な役割を果たしている小説『二重の存在』ともさまざまな面で類似点または相違点が指摘できる作品である。

## 第2章 『最期の抱擁』の概要

物語は、北ドイツロイド社(Norddeutscher Lloyd)の豪華客船ホルスタイン号(*Holstein*)がスエ

ズ運河北端の町ポートサイド (Port-Said) に寄港する場面から始まる。乗客はドイツ人、フランス人、イギリス人などであり、以下物語の脇を固める登場人物となる<sup>3)</sup>。まもなくリンデンフェルス公シャルル＝オーギュストとその夫人が乗船してくるという噂が広がる。リンデンフェルス家はベルリンの名家であり、夫人は先ごろ結婚したばかりでパリジェンヌであるらしい、また、夫人は若く美しいらしいが、シャルル＝オーギュスト公が父君を失ったばかりであることから、夫人も喪に服しているらしい、などの情報もたらされる。乗客たちは嫉妬の入り混じった好奇心から、とかく軽薄と思われがちなパリジェンヌがどのような女性か、船上でどこかの男性と道ならぬ恋に落ちるのではないかと噂している。口々にこのように噂しているのは、リンデンフェルス公とは面識のない、しかしできればこれを機に近づきになりたいと願っている乗客らであるが、中に一人、スウェーデンの外交官であるエリック・ローゼンストロームなる青年が、リンデンフェルス公と面識があることを明かすも、その夫人には会ったことがないと一同に告げる<sup>4)</sup>。エリックは船客の中では物静かで堅物と思われているので、中には次のようにかからかう者もあった。

Bravo ! Vous ferez donc connaissance avec sa femme. Ah ! monsieur Rosenstrôme, une jolie Parisienne, raffinée, coquette, qui trouvera le temps long à bord, qui aura du vague à l'âme, une femme armée de toutes les séductions, et qui sera prête à s'en servir ! J'espère que le fjord de votre cœur va se dégeler. Ce sera comme les étés de Norvège. (p. 6)<sup>5)</sup>

あら素敵。それなら貴方はご夫人ともお近づきになることになるのね。ああ、ローゼンストロームさん、洗練された、コケティッシュな愛らしいパリジェンヌのことだもの。船上では時間が長いと感じるはずだわ。きっと魂に波風が立つことでしょう。ありとあらゆる誘惑の武器を身に付けた女、きっとそれを使い出すことでしょうね。貴方の心のフィヨルドもそれで溶けるといいわ。ノルウェイの夏のように。

この言葉は乗客の「ミス (les misses)」と呼ばれている英国人の二人の女性が口々におしゃべりするうちに発せられたものであり、エリックはそれを受け流しているが、物語の冒頭において、その展開を予言する役割を果たしているものといえる。

やがて夫妻が乗船し、貴賓室からコーヒーを飲むために甲板に現れる。夫人はヴェールで顔を隠し、可能な限り人の目にさらされないような配慮をしているが、それでもその美しさを完全に覆い隠すことはできない。洗練された服装を喪中にはふさわしくないと批判する者もいるが、それをとりなす者もいて、良くも悪くも船内は色めき立っている。

やがてエリックはリンデンフェルス公と出会い、両者の会話から、これがベルリン以来3年ぶりの再会であること、エリックが船中にあるのは、北京の大使館の一等書記官に任命された

ため、赴任まで2カ月の猶予があるので、その休暇を利用して、かつて大使館員として滞在した経験があり、よい思い出のある日本を訪問するつもりであることが明らかになる。また、「髭は白髪交じりでも心は熱い(*si la barbe est grise, le cœur est toujours chaud*)」(p. 15)リンデンフェルス公の20歳の新妻が、噂通りのパリジェンヌであるがその母親はイタリア人で、シチリアの代母のもとで育っているので南欧的な「ミニヨンの国」<sup>6)</sup>の気質も備えていることがリンデンフェルス公自身の口から語られることになる。夫妻にとってはこの船旅が新婚旅行に当たり、父娘ほども年の違う夫<sup>7)</sup>が、「本当に子どもなのです(*une vrai enfant !*)」(p. 16)と評する妻に見せたいと願っているのは、「絵本のように広大な世界(*le vaste monde comme un livre d'images*)」(p. 16)なのだということも明らかにされる。

リンデンフェルス公は昼食に降りてきた妻をエリックに紹介する。エリックが以後旅の道づれとなるのが、「この方は日本のことを完璧に御存じなのです。すでに暮したことがあるのでね。日本という楽園の素晴らしいことどもを私たちに教えてくれることになるだろう(... *il connaît le Japon parfaitement, puisqu'il a déjà vécu. Il nous initiera aux merveilles du paradis nippon.*)」(p. 18)というリンデンフェルス公のセリフによって正当化される。

しかし妻のグロリアは、ヴェールをまとって現れた時のつつましさとは裏腹に、子供じみて快活な上にパリジェンヌらしい軽佻浮薄さと本能的な女の魅力を振り撒くすべを心得ていて、エリックはその様子に驚きと幻滅を感じる。初対面はむしろ反感と悪印象で始まった。「二人はすでにお互いに少しばかり嫌悪を抱き合っていた。それが始まりだった(*Ils s'en voulaient déjà un peu l'un à l'autre. C'était un commencement*)」(p. 21)と第2章は締め括られている。

やがて船中でのさまざまな出来事を通して両者の距離は徐々に縮められて行き、第10章(122頁)で二人はすでに接吻を交わすが、それを外交官仲間に目撃され諫められたエリックは、意図的にグロリアと距離をとるようになる。中国の情勢の変化で日本まで同行することは叶わぬかも知れず、いつ電報で呼び出されるかも知れない、と言い出すエリックに対して、自分の伝手を使うこともできるので船上に留まるように懇願するのは、二人の接近を知らず、妻の変調のみを気遣う夫のリンデンフェルス公であった。

最後の一線を超えるのは、日本においてである。東京のホテルで過ごす最後の夜、夫婦の部屋は別で、翌日には旅立つことになっているエリックとグロリアの部屋は向かい合わせになっている。これも、何も知らず、エリックに可能な限り妻の話し相手になって欲しいと願ったりリンデンフェルス公の計らいである。第15章の末尾は固有名詞のない以下のような記述で締め括られている。かくして事は成されたのである。

La nuit, l'hôtel est silencieux : dans un corridor, une porte s'ouvre sans bruit, une forme blanche aux pieds nus traverse comme un fantôme. Une autre porte s'ouvre, par laquelle elle disparaît.

L'amour a passé.(p. 191)

その夜、ホテルはひっそりとしていた。廊下で、音もなく一つのドアが開いた。裸足の白い人影が幽霊のように横切る。もう一つのドアが開き、そこに人影は消えた。愛が成されたのである。

やがて、夫による妻の追放と名誉の失墜、そして物質的窮乏による苦しい二人の暮らし、別離を経てエピローグで両者は再会するも、物語は飛行機の操縦士となったエリックの墜落死という結末を辿る。

ポール・リヴェルスダール名で発表された小説『二重の存在』との共通点としては、テムズ川に浮かぶ別荘としてのボートと、日本を目的地とした世界航路の豪華客船という違いはあるが、物語の大部分が船上で繰り広げられていること、そこに世界各国の有名人士が集まって、インターナショナルなサロンの雰囲気醸し出していること、また、そこで不倫に基づく恋愛物語が展開されて行くこと、最後に主要な人物の死によって物語が終わることなどが挙げられる。大きな相違点としては、『二重の存在』では物語の中心人物であり「二重の存在」であるロシア人女性ナターシャの異性愛と同性愛の絡み合いが物語の展開の重要な要素となるのに対して、『最期の抱擁』では同性愛的要素は影をひそめ、若く美しい南欧系パリジェンヌのグロリアと、これも若く美しいスウェーデンの外交官エリックの恋物語という、陳腐ともいえるメロドラマのような構図になっていること、『二重の存在』のナターシャは自死するのに対して、『最期の抱擁』のエリックは事故死するという点が挙げられる。

また、それぞれの登場人物がその出自の国なり地域なりの特性、というよりステレオタイプを担っていること、そのありようは大きく異なるが日本の存在が物語の進行上大きな影響を及ぼしていると思われることも両作品の共通点とみなすことができるものと思われる。以下、『最期の抱擁』における日本の記述について精査することにした。

### 第3章 『最期の抱擁』における日本の記述

一行が日本を訪れるのは、第13章から第16章、155頁から204頁にかけてである。第13章冒頭は「ついに神戸。日本の最初の港である(Enfin Kobé. Le premier port du Japon.)」(p. 155)という導入で始まる。神戸の港の描写はピエール・ロチ『お菊さん』冒頭の記述にも似て常套句めき、日本の商人は「猿」または「奇術師」に例えられている。

Le *Holstein* avait stoppé. Les marchands, par centaines, avaient envahi le pont et s'y étaient installés comme chez eux, accroupis sur leurs jambes repliées. Ils offraient aux passagers des objets bizarres, des boîtes truquées à combinaisons et à secrets, et, tandis qu'ils les retournaient dans leurs

mains agiles, des mains de singes, ils avaient l'air de prestidigitateurs ou de sorciers maniant des appareils de magie(p. 155).

ホルスタイン号が停泊した。数百もの商人たちが棧橋に我が物顔に入り込んできて、しゃがんで背を丸めている。彼らは通行人に奇妙な置物や組み箱、隠し抽斗のある細工箱などを売っていた。彼らが器用なその手、猿の手でその箱をひっくり返したりしている様子は、魔術の道具を操っている奇術師か魔法使いのようであった。

しかし情景描写はここまでで終わり、船客たちが上陸のために汽艇に乗り換えていると、グロリアの夫である貴公子は、カメラとフィルムを入れておいたトランクを探すといい、妻とエリックを先に行くように促す。上海から続く悪天候で、神戸は「鉛のように黒味を帯びた空のもとに (Sous un ciel noirâtre comme du plomb)」(p. 156)その輪郭を示し、グロリアも「景色に等しく灰色の気分だった(d'une humeur aussi grise que le paysage)」(p. 156)とされている。船から降りるときにエリックが手を貸そうとしてもグロリアはそれを受け入れようとしない。以下、日本に関する記述は、地理的なあるいは観光案内図的な記述というよりは、グロリアやエリックの心模様を反映し、物語の展開を予告し、その背景となるようなものに変容して行く。一行は日本で、神戸・京都・日光・東京・鎌倉・奈良・宮島を訪れる。エリックは上に見たように東京で最後の夜をすごしたのち北京の任地へと一足先に旅立つことになる。ここでは、日本国内を訪れた順番に、各地の描写を物語の展開とともに見ていくことにしたい。

### 3-1. 神戸

かたくなに心を閉ざしていたグロリアは、辛抱強く優しい言葉をかけ続けるエリックの真心に触れてやがて心を開き、二人は再び口づけを交わすが、そこに夫のシャルル＝オーギュストが現れる。シャルル＝オーギュストの発言に現れる日本は、その無関心を表し、エリックやグロリアが日本に抱くイメージとはかなり乖離のあるものであることが明らかになる。船を降りるときはふさいでいた若妻が陽気さを取り戻しているのを見て「ご婦人方のことは理解できない(Les femmes sont incompréhensibles)」(p. 158)と言った夫に対して、グロリアが「それは日本にいられるという喜びのためですわ(C'est ma joie d'être au Japon)」(p. 158)と答えたのを受けて、夫は初めて見た日本を「貴女の日本について、話そうではないか。貴女の言うかの満開の桜はどこにあるのかね。醜く、陰鬱な国だ。こんな国が貴女を魅了するなら、貴女は実に気難しくないということになるね(Votre Japon, parlons-en ! Où sont-ils vos fameux cerisiers fleuris ? Un pays laid, terne. Si c'est cela qui vous enchante, vraiment vous n'êtes pas difficile.)」(p. 158)と評する。日本の景色や文化よりも、見つからなかった自身のコダック<sup>8)</sup>のカメラと、これまでに撮りためたフィルムによほど未練がある様子である。この夫の発言に続くホテルまでの道のりの描写は、



夫の日本に対する悪印象を助長するようなものである。

... ils prenaient tous des rickshaw pour grimper la pente rapide qui conduisaient au Thor-Hôtel. Derrière chaque voiture, un homme poussait, aidant le coureur qui s'essouffait, attelé par devant. La côte était escarpée, les Japonais suaient à grosses gouttes, et cependant ils ne cessaient pas de rire à belles dents. (p. 158)

一行はそれぞれリキシャに乗って、トール・ホテルに向かう急な坂を上った。それぞれのリキシャの後方には押し手がいて、息を切らして上る前方の運び手を助けている。斜面は急角度で、日本人らは大粒の汗を流しているが、美しい歯を見せて笑うことをやめなかった。

これに対し夫は「あの猿どもは一体何をやっているのか。つまりは不愉快だな。私たちのことを馬鹿にしているのか(Qu'est-ce qu'ils ont donc, ces singes-là ? C'est agaçant à la fin. Est-ce qu'ils se moquent de nous ?)」(p. 158)と不快の意を露わにする。日本人と日本の文化に対するこのような夫の無理解と無関心は、結果的に日本に対する価値観を共有するグロリアとエリックの距離を心理的にも身体的にも接近させることになるのであるが、ここではエリックが日本人の微笑の意味を解説する。

—Nullement, cher ami, expliqua le jeune Suédois. Ils rient par crânerie, pour montrer qu'ils n'ont aucune peine à faire leur rude besogne. C'est comme les hercules de foire quand ils soulèvent des poids : toujours le sourire sur les lèvres. (p. 159)

「いいえ、親愛なる友よ」と若いスウェーデン人は説明した。「彼らは空威張りで笑っているのですよ。あんなきつい仕事をしていても、少しも苦しくはないのだということを示すために。ちょうど見世物小屋の力自慢が重りを持ち上げるときに、唇に常に微笑を浮かべているのと同じことです」<sup>9)</sup>。

「鳥居(Tori)」と呼ばれる朱塗りの門があるほかはロンドンの郊外にある英国風のコテージを思わせるトール・ホテル<sup>10)</sup>の記述に続いて、リンデンフェルス公夫妻には海に面したスイート・ルームが与えられ、窓からは通りもよく見える。ホテルの周囲を往来しているのは、土地柄などお構いなしの暗い色の着物を着た日本人たちであり、それを見てからかうような調子で「ほら、あれがかの有名なキモノかしら。これもまた落胆の種ですわね、そうではなくて、エリック(les voilà, ces fameux kimonos ? Encore une déception, n'est-ce pas, Éric ?)」(p. 159)とグロリアが言ったのを夫は聞き咎める。妻はエリックをその名で呼んだのであるが、すでに35日間も



一緒に船旅をしているのだから、その名を呼ぶほどに親しい気持ちを抱いているのだと妻は抗弁する。夫はこの抗弁を疑わない。妻は夫とエリックに支えられて今この時にあることに満足している。この均衡がいつか崩れることを今は考えたくないのである。グロリアは二人の男性に支えられていることの喜びによって、「彼女を取り巻く周囲の凡庸さには寛容になっていた (*indulgente pour le décor médiocre qui l'entourait*)」(p. 161)のであるし、「自らの理想主義によってそれに施しを与えていた (*elle lui faisait l'aumône de son propre idéalisation*)」(p. 161)のである。これに次いで語りは、神戸の現実の情景を「さまざまな色の提灯の他は、予備知識もなくやって来た者に詩的な感興を呼び覚ますに違いないようなものは神戸には何もなかった (*les rues de Kobé n'ont rien, sauf leurs lanternes multicolores, qui doit suggérer des sensations poétiques à des visiteurs non prévenus*)」と描写している。グロリアは自らの光と優しさで周囲を満たしていたのであり、畢竟「夢の中を歩いていた (*Elle marchait dans le songe*)」(p. 161)ののだとしている。したがってグロリアは、目にするものをどれも好ましいものとしてとらえている。

Elle s'amusait des petites Japonaises qui trottaient dans la rue, faisant claquer leurs *guetas*, sorte de patins ou de socques qui marquent à chaque pas, d'un coup sec, le rythme de leur marche. Tout l'enchantait, lui était immédiatement sympathique et familier. (p. 116)

彼女は小さな日本の娘たちが、スケートか木靴の一種であるゲタを鳴らしながら通りを歩いているのを見て嬉しがった。下駄は、歩くごとに乾いた音を立てて、その歩みのリズムを奏でるのだった。すべてが彼女を魅了し、すべては彼女にとってただちに親しく共感を覚えるものとなるのだった。

グロリアにとって初めて目にした日本の情景はいとしいエリックによって導かれ示された未知の国であり、それだけになお一層好ましいものとしてその目には映る。

C'est qu'elle avait pris contact pour la première fois avec la terre nipponne dans une minute heureuse : le Japon, dont elle avait tant rêvé, était de plus pour elle le pays béni où elle s'était réconciliée avec Éric, où elle avait ressaisi le bonheur. (pp. 161-162)

というのも彼女が日本の地と最初の接触を持ったのが、幸福な時間においてだったからである。彼女があれほど夢見た日本は、この地が、エリックと和解した地、再び幸福を掴んだ地であるがゆえに一層祝福された土地となったのである。

日本に関するこのような記述が、スエズ運河以来立ち寄って来た他のアジアの地と異なるのは明らかである。一行はこまごまとした土産物を商う店にも立ち寄り、これまで同様さまざま

な買い物をするが、グロリアがそこで関心を抱くのは三味線であり、この楽器によって奏でられる音楽である。他の寄港地のそれとは異なり、日本をめぐる記述が、単なる物質的な好奇心を満たそうとするものではなく、もう一段高い精神性を目指しているのだということをここに見て取ることができるだろう。

Les Japonaises parurent, et une séance étrange commença, dont la jeune femme devait garder le souvenir longtemps, comme de son initiation véritable à la vie et à l'âme nipponne. (p. 162)

日本人の娘たちが現れ、不可思議な演奏が始まった。この演奏の宴を、彼女は長い間、日本の生活とその魂への入門の宴として心に留めることになるのである。

三味線と琴による演奏と歌は、ひとえに甘美なものではなく、何度も「不可思議(étrange)」という語が繰り返されるように、それは時として、「放蕩や苦痛あるいは怒りに猛り狂う動物のような (comme des bêtes affolées de luxure, de douleur ou de colère)」(p. 163) 叫びと化し、快楽と苦悩という相反する、しかし考えてみれば愛において分離不可能な要素を提示し、この物語における愛の進展とそれによる葛藤を予言しているかのように思える。

Le Japon où les mousmés chantent et dansent, où les cerisiers neigent rose sur la tête des fiancés, où les samouraïs aux jupes écaillées de fer s'ouvrent le ventre pour un chagrin amoureux. Le Japon sauvage et tendre, le Japon rêve et cauchemar. (p. 164)

ムスメたちが歌い踊る日本。そこでは許婚たちの頭の上に桜の花が薄紅の雪のように降り注ぎ、鉄の帷子をまとったサムライたちが、愛の苦悩のために腹を切り裂く。優しく野蛮な日本、夢と悪夢の日本。

このような日本はもちろん現実のそれではなく、グロリアの心のうちに培われ、音楽によって醸成された夢想の日本であるが、その二律背反的な様相のもとに愛の国の歓喜と苦悩を提示し、かくしてグロリアとエリックの恋の前途を予告するものともなっているが、恋する心を音楽によってさらに高揚させたグロリアは、そこに予言を読み取ろうとはしない。悲恋の予感  
は登場人物らの頭越しに、読者のみに示されることになる。恋人の傍らにあって幸福なグロリアにとって、「悪夢は雪のように溶けて、夢の中に消えて行く (le cauchemar se fondait, disparaissait dans le rêve)」(p. 164)のである。それはグロリアにとっては「北斎が描いたような黒や白の山々の一つを夢の中でエリックとともに昇っているように見え (Il lui semblait gravir en songe, avec Éric, une de ces montagnes noires et blanches comme en a peint Hokusai)」(p. 164) そこでは「月の光が金や銀をまぶし、霧氷のきらめきが星をちりばめたように見える (le clair de lune

glace d'argent et d'or, et sur lesquelles les brillants du givre ont l'air d'un semis d'étoiles)」(p. 164)のである。

他の寄港地とは異なり、日本の描写は単なる即物的な観光案内のようなものではなく、まずは音楽を介して精神性の高みに至って、エリックやグロリアのみならず、リンデンフェルス公の抱く日本のイメージにも影響を与えるようになる。日本はまさに「その誘惑が、非現実性そのものによって成り立っているような理想の国(Pays idéal dont la séduction semble faite de son irréalité même)」(p. 165)として立ち現れる。このような日本の情景は、「自然が絵画に似ようと努めている(la nature s'efforce de ressembler aux tableaux)」(p. 165)と形容され、前章の音楽に続いて、ここでは絵画の比喩によってさらに抽象度の高い日本のイメージを提示している。

... les paysages ont l'air d'être peints par quelque aquarelliste épris de chimère, avec des tons bleus, gris ou mauves, d'une légèreté telle, d'un embu si vaporeux qu'ils semblent étrangers au monde ordinaire des couleurs.(p. 165)

…景色は、幻覚に魅了された誰か水彩画家によって描かれたかのようなものである。それは青や灰色、そして紫色の色調をもって、あまりの軽やかさ、蒸気が立ち込めて煙っているその様は、色に満ちた通常の世界とは無縁のもののように思われる。

このように描写される日本の情景が、無秩序に原色の溢れ返る他のアジアの情景とは全く様相を異にするものであることは明白である。確かに、「女たちは華奢な置物であり、家並みは玩具の家(les femmes sont des bibelots frêles, les maisons des jouets)」(pp. 165-166)という「小ささ」への言及は、ピエール・ロチやラフカディオ・ハーンのそれを忠実に継承しているものといえようが、このような情景が人間の精神、ひいては愛に影響を及ぼすさまを、神戸の滞在を締めくくる以下のような記述のうちに見て取ることができる。

Tout flotte, tout ondule et se dilue en nuances moelleuses, en contours assouplis ; le rêve enveloppe cette contrée : le monde extérieur n'est qu'une griserie universelle qui étroit l'âme mollement et l'apaise, n'y laissant subsister qu'un infini besoin de tendresse, d'oubli et d'abandon aux forces éternelles de l'amour. (p. 166)

すべてはたゆたい、うねり、快いニュアンスの中に、まどろむような輪郭の中に溶け込んで行く。夢がこの国を包み込んでいる。外界はひたすら、魂を優しく抱き締め、和らげるまったき陶酔なのであって、そこに残されているのは、優しさと忘却、そして愛の永遠の力に身を委ねることを無限に求める心のみなのである。

### 3-2. 京都

上に見たように、エリックが夫妻と別れる東京の一夜において恋人たちは肉体的に結ばれることになるが、その一夜に至るまでの日本各地の滞在において、愛はまず精神的な結びつきとして描かれ、深められて行くことになる。それはまた季節の進行とともに明るい様相をまとい、それが登場人物の心情にも反映される。一行は京都で都ホテル<sup>11)</sup>に投宿するが、そこでグロリアがまず魅了されるのが、食堂に活けられたたった一輪の、しかし大輪の花であり、日本独特のこの活け花の美学が、「釉葉のかかった小さな角状の器から飛び出すただ一本の花茎によって美の一形態を創り出す芸術 (l'art de créer une forme de beauté avec la simple tige fleurie jaillissant d'un cornet d'émail)」(p. 166)と提示される<sup>12)</sup>。花の季節の到来とともに、ここでもまた日本をめぐる描写は、単なる物質的な装飾としてではなく、その精神性にまで及んでいることがわかる。給仕をする女たちは「春の着物を着て蝶のように食卓の間を舞っている (elles semblaient de grands papillons voletant de table en table)」(p. 167)が、これもまた本当の春の訪れを物語るものである。屋外のそれは、まずは視覚的な情景描写によってもたらされるが、それはここでも登場人物の心情に巧みに反映されていることが分かる。

Car le printemps était venu, le soleil s'était levé sur ce pays en même temps que dans l'âme de la princesse rassérénée. En quelques jours, les cerisiers avaient fleuri. Le Miyako-Hôtel, bâti sur une colline, dominait la contrée. De son balcon, Gloria pouvait voir la houle pourpre et rose, avec des remous, des frissons, des chatoiements, écumer sous la lumière. (p. 167)

というのも春が来ていたのだ。この国にも、心安らかになった公妃の魂にも、時を同じくして太陽が昇っていたのである。数日のうちに桜が開花していた。都ホテルは丘の上に建っていて、あたりを見下ろしている。グロリアはそのベランダから緋色や薄紅を帯びた花のうねりが、渦巻き、震え、煌めきながら灯りのもとに泡立っているのを見ることができた。

この桜の季節が日本人全般の精神性にもたらす影響についての説明がもたらされる。第14章の後半を充ててこの京都滞在の記述において、物語の進行はいったん宙づりにされ、様々な側面から日本の美学、ひいては日本人の精神性が具体的に描写されて行く。これは他の土地の描写においては見られない傾向であり、それだけにこの物語において、京都が特権的な位置を占めていることは明白である。日本の四月は、まずは概観として描写される。

Les mois d'avril, où les cerisiers rougissent, est au Japon un mois de grâce et d'allégresse. Les boutiques chôment pour la plupart, les agriculteurs laissent dormir la terre. La vie laborieuse et

mercantile est interrompue : c'est une trêve fleurie, prescrite aux efforts arides des hommes par la nature elle-même. (p. 167)

桜の花が紅色にほころぶ四月は、日本では恩寵と歓喜の月である。店はほとんど休業し、農家も耕地を眠らせておく。労働や商売は中断されるのだ。それは、いみじくも自然そのものによって人間たちの苛酷な努力に対して処方された、花咲く休暇なのである<sup>13)</sup>。

さらには、このような季節が日本人の精神性にもたらす効果が紹介される。それはあたかも、物語の進行の中断を正当化するためであるようにも思われる。

Alors tout est indolence et paresse heureuse ; on dirait qu'une divinité nonchalante mène la ronde des heures et leur impose un rythme alangui. Le temps oublieux lui-même s'arrête et plane, les ailes détendues, sur la terre charmée, ivre de fleurs.(p. 167)

そうとなればすべては怠惰で、幸福な安逸である。まるで暢気な神が、時を輪に繋ぎ、ゆっくりとしたリズムを押しつけているように思える。物忘れしがちな時そのものが立ちどまり、花に酔い魅了された大地の上にその緩んだ翼を漂わせているのだ。

このように幸福に停止した時間の中で一行は野遊びに出かけるが、そこで印象的に語られるのは、「空想と夢の職人によって整えられ、甘美なまでに込み入った想像力の気まぐれに従わせるために自然を無邪気に痛めつけている(arrangés par des ouvriers de fantaisie et de rêve, qui tourmentent ingénieusement la nature pour la plier aux caprices d'une imagination exquisement alambiquée)」(p. 168) 日本庭園である<sup>14)</sup>。人為による自然の歪曲は、ここでは日本の美学の特性の一つとして紹介されている。

On dirait qu'ici la nature et les hommes ont voulu faire de leur mieux pour s'adapter à l'esthétique des kakemonos. Le Japon, précieux aux imaginations froissées par la rudesse de l'Occident et la nudité de l'existence européenne, est patrie de l'artificiel : c'est le pays où les enfants se promènent dans la rue avec des joues peintes et fardées. (p. 169)

ここではまるで自然と人間が、掛物の美学に適合するように可能な限りの努力をしているかのようなのである。日本は、西洋の粗野さによって損なわれた想像力や、ヨーロッパ人の生活の飾り気のなさにとっては貴重なものであるが、人為の祖国である。この国では子どもたちが白粉や頬紅を塗って往来を歩いているのだ。

これに続いて花魁行列と思われるものが描写されるが、語りはやがて舞台の上で繰り広げ

られている舞踊と音楽に焦点を定める。またしても琴と三味線が登場し、耳に残る弦楽器の唸るような低音に、猫を思わせる「悪魔的な叫び(miaulements)」(p. 170)が加わる。この、「耳を劈くような盛りのついたような叫び(les cris enragés percent les oreilles)」(p. 170)は、日本文明の優しい魅力の下層に存在し続ける古代の粗野さ(l'antique sauvagerie qui persiste sous les grâces caressantes de la civilisation nipponne)」(p. 170)、すなわち獣性とでもいったものを思い起こさせるものである。そして、このような獣性への言及は、しばらく宙づりにされていた物語の進行を促し、エリックとグロリアの関係が進展する契機となる。

Éric et la princesse subissent ce charme qui les enveloppe, les pénètre et dissout en eux les derniers scrupules, les restes de préjugés qu'ils ont apportés de leur Occident lointain.(p. 170)

エリックと公妃は、二人を包み込み、二人の中に浸透して行って、最後のためらい、遠い祖国の西洋から持ってきた先入観の名残を彼らの中で氷解させるこの魔法の力を受けとめている。

「最後のためらい」とは、口づけまで交わしながらその先をためらっている二人が、さらに一歩踏み込んで互いの気持ちを確認、愛を成就させることであろう。しかしここで二人は自覚的に愛に突き進むのではなく、そのためには不可思議な「魔法の力」が必要であることが明記されている。愛の成就には地霊とでもいったものの作用が不可欠なのであり、この物語ではそれが日本という形象をまとして示されているのである。

La magie de la terre asiatique est la complice de leur rêve ; elle endort en eux les énergies héréditaires qui tenteraient encore de lutter contre la passion : elle y exalte toutes les puissances de désir, elle leur verse un philtre d'oubli qui noie leur conscience et leur volonté. (p. 170)

アジアの地の魔力は彼らの夢の共犯者である。それは彼らの中で、情熱に対して未だにこの期に及んで戦おうとする遺伝的な活力を眠らせ、欲望のあらゆる力を高揚させ、彼らの意識や意思をおぼれさせる忘却の媚薬を注ぐのである。

このようにして高揚した二人にとって障害となるのは夫の存在である。しかし、二人と同じように日本に魅了された夫は、以前にも増して一緒に外出するようになっている。「すぐ近くにあるように思えても未だに掴みとることのできない幸福に焦らされると同時に疲れ、苛立った二人(Énervés, à la fois impatientes et las du bonheur proche et toujours insaisissable)」(p. 171)は、その時が来るのを「待つ苦しみを束の間の口づけで紛らわせる(tromper par des baisers furtifs l'angoisse de leur attente)」(p. 171)のだった。

3人はそろって神社仏閣を見て回るが、10キロもの距離にわたって朱塗りの鳥居が森のように並び立っている聖地<sup>15)</sup>では、夫が自分の人力車の車夫と話をしている間に、エリックは自分とグロリアの名を鳥居の柱に墨で書いてから、「この鳥居に名前を書かれた人々は永遠に結ばれると神官たちが請け合っているのですよ (les prêtres assurent que ceux dont les noms sont écrits sur ces Toris doivent être unis pour l'éternité)」(p. 173)とグロリアにその理由を説明する。グロリアも「ええ、永遠に(Oui, l'éternité)」(p. 174)と応じる。ここで注意したいのは、二人にとって重要なのは、肉体関係を持つことというよりは、永遠に結ばれることなのであり、それはこの場面で初めて、「結婚」という言葉で示唆されることになる。ここでも神官の言葉に促されてエリックは二人の恋愛の成就を願うことになるが、そのためにはこの地の地霊のようなものが必要とされていたことが分かる。二人は「この赤い森、葉もなく葉ずれの音もない不動の森の中で、不死の結婚を束の間先取りして一瞬唇を合わせる (sous la forêt rouge, sous l'immobile forêt sans feuilles et sans murmures, leurs lèvres un instant se joignent, brève anticipation de ce mariage immortel)」(p. 174)のである。

京都滞在の最後の場面で語られるのは、日本の主要な教団の一つが設立百周年を祝う祭りで各地から巡礼が京都に集まって来て、一行の3人もその祭りを見物に出かけるくだりである。このような祭りが明治末の日本に実際に存在したのか否かは不明であるが、この場面もその記述は詳細を極め、少なくとも類似の祭りを実際に目の当たりにしなければ書くことは難しいように思われる。興味深いのは、仏陀の代弁者として崇められる教団の代表者が群れなす教徒の前に現れる場面である。一行は3人であったはずであるが、教祖の前に立って祝福を受けるのはエリックとグロリアのみであり、語りは夫を意図的に排除しているかのようなようである。

Éric et la princesse s'inclinent comme les autres. Le prêtre s'érige dans la majesté de sa chape d'or, il paraît très grand, à cause de son front levé au-dessus de tous les autres fronts qui se penchent vers la terre. Sa face, transparente comme du jade blanc, immatérialisée, est admirablement sereine. (p. 176)

エリックと公妃は、他の人々と同様にお辞儀をした。神官は黄金の法衣の威厳をまもって立ち、他の者どもが地面に向かって額を下げている上に立って額を上げているので、とても大きく見えた。その顔は白い翡翠のように透明で、非物質的であり、驚嘆すべきほどに穏やかだった。

教祖は両手を大きく広げ、指の先から「世界に平和を惜しみなく与えている (dispenser la paix au monde)」(p. 176)ようであり、陽の光を受けて「人々の魂に光のマヌを降らせている (tombe sur les âmes une manne de lumière)」(p. 176)ように見える。この祝福体験によって、二人は「あ



る宗教、新しい人生に迎え入れられたような感覚(*la sensation d'être initiés par lui à une religion et à une vie nouvelle*) (p. 176)を覚える。それはまるで「第二の洗礼、神々しい東洋の洗礼(*un second baptême, celui de l'Orient divin*)」(p. 176)のようなものであった。かくして二人は一種の浄化を受け、これまで引きずって来たすべてのしがらみから解放されたような心境に至る。

En même temps, tout ce qu'ils avaient apporté d'Europe, préjugés, sentiments imposés ou acquis, idées religieuses ou morales, se détache d'eux-mêmes et s'abolit. Une âme neuve leur est venue, leur véritable existence date de cette heure. (p. 176)

同時に、二人がヨーロッパから持って来たすべてのもの、先入観、強いられたあるいは身についた感情、宗教的なあるいは道徳的な考えなどが彼ら自身から離れて行き、廃止された。新しい魂が二人に訪れたのであり、この時から二人の真の人生が始まったのである。

かくして二人の気持ちを押しとどめる障害はなくなり、ここで語りが意図的に除外しているのと同じように、具体的な障害の権化である夫の存在もそこでは問題にされることはなくなる。新しい人生において自由な愛は必要不可欠なものであり、それはすでに作用を始めているのである。この宗教儀式によって、二人はあたかも結婚の秘跡を授けられたかのように感じているのだと言ってもよいだろう。

Tout ce qui les a séparés longtemps, tout ce qui gêne encore l'élan de leurs deux cœurs l'un vers l'autre, n'existe plus : il n'est plus vrai que Gloria ne soit pas libre d'aimer, qu'elle ait été enchaînée par le mariage à un autre ; tout cela c'est du passé, c'est cette vie de là-bas qui vient de prendre fin quand l'autre a commencé. Éric et Gloria sont nés une seconde fois. Bouddha qui les adopte les affranchit des vaines lois de l'Occident et ne leur en prescrit qu'une seule : la loi de l'amour. (pp. 176-177)

二人を長い間隔でいたすすべてのもの、二人の心が互いにもとに飛んでいくのを妨げていたすべてのものはもはや存在しない。グロリアが自由に愛することはできない、他の男との結婚によって束縛されているというのはもはや真実ではない。これらはすべて過去の出来事であり、かの地での人生は、新しい人生が始まった時に終わったのである。エリックとグロリアはもう一度生まれ変わったのである。二人を庇護する仏陀は、二人に西洋の虚しい掟を飛び越えさせ、今やただ一つの掟、愛の掟のみを二人に課しているのである。

もちろんこれは、恋するふたりの勝手な思い込みなのではあるが、重要なのはそれが、京都の地において、宗教的な環境のもとで、最終的には仏陀<sup>16)</sup>の導きによって新しい人生に踏み出

したように描かれているという事実である。一見物語の進行に関係がないように思われた京都の地とその文化の描写は、二人がついに新しい人生に踏み出す決定的な転換点をあらかじめ用意するために配されているのであって、それが肉体的な結びつきに先立って霊的な結婚として描かれていることもここで確認しておきたい。

### 3-3. 日光

一行は鉄道日光に至る。横浜での短期滞在の後、エリックの助言に従って「かつて極東の芸術の揺籠であった古代の驚異の町(l'antique et merveilleuse cité qui fut le berceau des arts de l'Extrême Orient)」(p. 178)で「この帝国の中で最も美しい寺の数々を持つ(contient les plus beaux temples de tout l'empire)(p. 178)町である日光を訪れる。神戸・京都から日光に至るのは、地理的に考えれば不自然な経路ではないかと思われるが、この地でも二人の恋の進展に不可欠な出来事が起こり、東京の一夜に向けての用意が成されるのであるから、これは地理上合理的な旅程というより、物語の進行上必要な旅程であるといえるのだろう。というのもこの地でリンデンフェルス公は一人宿に留まり、グロリアとエリックのみが神官の特別の祝福を受けに出かけ、二人の結びつきはさらに霊的な深まりを見せることになるからである。

このことは、日光の情景描写の変化とも一致している。リンデンフェルス公も同道しているホテル到着までの日光は、観光案内に描かれているような皮相的な情景であり、どちらかといえばリンデンフェルス公の印象を代弁しているものといってもよいだろう。

Nikko apparut comme un rêve nippon, avec ses rues étroites et montueuses, ses maisons découpées bizarrement sous un ciel froid poudré d'étoiles. De place en place luisaient les lanternes rouges et bleues ; à travers les volets de papier on entendait le bourdonnement du koto et du samisen : c'était vraiment un décor de *Madame Butterfly*. (p. 179)

日光は、狭い上り坂や数多星のちりばめられた寒空から奇妙な具合に切り取られた家並みとともに日本の夢のように立ち現われた。ところどころ赤や青の提灯が光り輝き、紙の障子戸を通して、琴や三味線のざわめきが聞こえてくる。まさしく『蝶々夫人』の背景のようである。

リンデンフェルス公は、分別と中庸をわきまえた常識人であり、新しい物好きで紋切り型を愛する俗物的な面ものぞかせるが、また、「このような寺はもう十分に見た(qu'il avait vu assez de temples comme cela)」(p. 179) といって「返信の遅れている手紙がたくさんある(tant de lettres en retard)」(p. 179) ことを理由に一人ホテルに残る社交人でもある。このことは、物語の進行上グロリアとエリックを二人だけで外出させ、その関係がさらに深まる契機となるための必然で

もあるが、そうなることを予測できないリンデンフェルス公の鷹揚さ（ある意味では品の良さ）と、グロリアやエリックとは対照的に、霊的なものには興味を抱かないその現実志向を対比的に描き出してもいる。恋する二人の外出の口実は、ホテルの主人の「前もっていくらかの寄進をすれば、神官が特別に興味深い儀式を執り行ってくれる (*moyennant une offrande convenue à l'avance, les prêtres leur offriraient le régal d'une curieuse cérémonie célébrée pour eux seuls*)」(p. 180)という提案に応じたものである。これまでに何度も寺を訪れているはずの二人であるが、寺に入るときには靴を脱がなければならないという決まりごとがここで初めて紹介される。それは靴が「道中のさまざまな不純なるものによって汚れている (*que les impuretés du chemin ont souillées*)」(p. 180)ためであり、他の寺では、靴の上からカバー様の布袋を被せるだけで済むことが多いのに対して、この寺はより厳しく規律を守らせるので、「中に入るためには編み上げ靴やアングル・ブーツを脱がなければならない (*On doit enlever bottines ou brodequins pour y avoir accès*)」(p. 180)ことが示される。「(侍女) のアグラエがグロリアの靴を脱がせ、またはかせなければならない (*Il faudrait donc qu'Aglaé déchaussât et rechaussât la princesse*)」(p. 180)のである。このことは、この寺がとりわけ格式の厳しい寺であることを物語り、これから行われる儀式がそれだけ格調の高いものであることを予告しているが、また「靴を脱ぐ」という行為によって、やがて訪れる情事の時を暗示しているかのようでもある。

それぞれの人力車に揺られて行く寺までの道のりは、「濁流を渡るために二匹の蛇が遣わされ結合して奇跡のアーチとなった (*les deux reptiles métamorphosés forment, en se réunissant, l'arche de ce pont miraculeux*)」(p. 181)の前や、「帝のためにしか開かれない門 (*Il ne sert que pour les empereurs*)」(p. 181)の前を通り、長い上り坂を経る通過儀礼めいたものであり、やがて入口に施されたかの「三猿」の記述に至る。

Sur une frise, à gauche, étaient sculptés trois animaux mystiques, trois singes sacrés. Le premier, dit le singe aveugle, se voilait les yeux avec ses mains : le second, le singe sourd, se couvrait les oreilles, et le troisième la bouche, et c'était le singe muet. (P. 181)

壁上部の装飾部の左側に、三匹の神秘的な動物、聖なる猿が彫られている。最初の猿は盲目の猿と言われ、手で両目を覆っている。次の猿は耳を覆う耳の聞こえない猿で、三番目の猿は口を覆っている口のきけない猿である。

このような描写は観光案内<sup>17)</sup>そのままの記述であるが、この先では、この三重の図柄の意味するところは「敬虔な人間は不純なことどもを聞くこと、見ること、口にすることを慎まなければならない (*l'homme pieux doit se garder d'entendre, de voir ou de proférer lui-même des choses impures*)」(p. 181)と説明される。靴を脱ぐときに説明と同じく、ここでも「不純なるもの (*choses impures*)」

impures)」の排除が強調され、恋する二人がいよいよ聖なる神域に近づいていることが示されている。次に描写されるのは、万巻の書や経典を収めた回転式の書棚<sup>18)</sup>であり、案内人は二人に「この書棚を回転させることの出来た者は、三年間の幸福を保証される (Celui que peut la faire tourner une fois sur elle-même, est assuré de trois années de bonheur)」(p. 182)」と説明する。それを聞いたエリックは笑みを浮かべて書架に近づくと、強靱な身体で書架を回転させて見せた。グロリアはこれまでも何度も目の当たりにしたエリックの若い力に感嘆するが、エリックは「私はそれ以上のことは望まないよ。三年の幸福があれば、哀れな男にはもう十分なのだ。多くの人間はそんな幸運もなしにこの世を去っていくのだから (Je n'en demande pas davantage. Trois années de bonheur, cela peut déjà suffire à un pauvre homme, et beaucoup auront passé sur la terre sans les avoir)」(p. 182)と言って快活に笑ってみせる。そしてこの発言はエリックの未来を予言するものになる。この物語の末尾では、この時からおよそ3年後、グロリアとエリックの再会とエリックの死が語られることになるからである。

やがて一行は本殿に至り、靴を脱ぐと「神道の象徴的な色である (couleur symbolique du shintoïsme)」(p. 182)緑色の衣を羽織るように指示される<sup>19)</sup>。グロリアはまるで「キリストの許婚者たちの神秘の衣をまとったかのように (elle eût endossé la robe mystique des fiancées du Christ)」(p. 183)感じて感興を覚える。かくして本殿への参拝は、「法悦の極みの最高の高みの領域に魂が飛翔する (les âmes s'envolent dans les régions les plus éthérées de l'extase)」(p. 183)出来事として描かれる。儀式の中で、神官はグロリアに聖なる酒を勧める。グロリアは酒に口をつけ、すぐにそれをエリックに渡す。それはまるで「子供の頃に聖体拝領を受けたときのように (elle communiait comme aux jours de son enfance)」(p. 184)グロリアには感じられ、それはあたかも聖なる結婚の儀式のようでもある。二人を神官が幣で祓うその「厳かな身振りによってすべての罪が赦されていった (Le geste hiératique les absorbait de tous péchés)」(p. 184)のであり、グロリアはかつて聖体拝領を受けた時に勝るとも劣らぬ深い感銘を受ける。

Elle avait ressenti une impression bien moins profonde lorsque jadis, en robe blanche et en voile de gaze, elle s'était agenouillée parmi les autres communicantes pour recevoir l'hostie. (p. 184)

彼女は白いドレスと薄衣のヴェールに身を包み、他の聖体拝領の娘たちと一緒に並んで跪いて聖餅をいただいた時に勝るとも劣らないほどの深い感銘を感じていたのだった。

「白いドレスと薄衣のヴェール」は少女の聖体拝領の正装であるが、それはまた神聖なる結婚を象徴する衣裳でもある。この祝福によって今や二人は「純粋な (purs)」存在となり、神前に立つことが許される。その神格は、「仏教の叡智そのもののように深い象徴作用によって (symbolisme profond comme la sagesse bouddhique elle-même)」(p. 185)磨かれた鋼の鏡によって

表されている。以下、語りは神道の教義を説明する。

L'être éternel et absolu est, pour elle (=la religion nipponne), l'Esprit, la Conscience universelle et suprême qui voit et qui pense, l'Univers, la suite des siècles, le mouvement ininterrompu des êtres et des choses, — le monde, enfin, — n'existe que comme un reflet changeant, qui se joue, toujours mobile, toujours près de s'effacer et renaissant sans cesse, sur ce miroir incréé. (p. 185)

それ（この日本固有の宗教）にとって、永遠で絶対的な存在とは、精霊、すべてを見、考える普遍的で至高なる意識、世界、世紀の連続、存在と事物の間断なき運動なのであって、つまるところ世界は、この人工物ではない鏡に映し出される、常にうつろう、常に消え去りまた甦る変化としてのみ存在するものなのである。

この教えからグロリアは、「人間の苦しみや喜びは単なる反映にすぎず、もはや真に存在するものではない (la douleur et la joie humaine, simples reflets, ne sont vraiment plus)」(p. 185) ことを理解し、「深く果てしない感動 (une émotion grave, infinie)」(p. 185) を覚える。恋する二人の顔が同時に屈み込み、一緒に鏡に映る瞬間があると、グロリアは「あたかも自分の恋情が一瞬神の思考のうちに反映されたように (comme si son amour s'était une seconde reflété dans la pensée divine)」(pp. 185-186) 感じ、また、二人が「すべてを見、すべてを作りたもうた永遠のまなざしの中にその恋情が移行することによって聖別されたように (comme s'ils avaient été consacrés par son passage dans cette vision éternelle qui voit tout et crée tout en le voyant)」(p. 186) も感じて、「大いなる宗教的戦慄 (un grand frisson religieux)」(p. 186) を覚えるのである。

神殿の外には「清めの作用のあるその水に助けを求める者の魂を癒し浄化する泉水 (une fontaine qui apaise et purifie l'âme de ceux qui recourent à ses ondes salutaires)」(p. 187) があり、グロリアは自らの手を浸す。水の中で「純白のこの世のものとは思えない白い蓮の花 (une fleur de lotus irréaliste et toute blanche)」(p. 187) のように見えるその手でグロリアは水をくみ上げ、エリックの唇に運ぶ。エリックがその指の先から口で受け取るのは、浄化された「液体の真珠 (les perles liquides)」(p. 187) なのであるが、このことは、神前の儀式によって霊的に浄化され許された二人の恋が、身体的結びつきへと徐々に移行する段階を示しているものといえよう。

やがて二人は泉水を過ぎ、小さな神社の前にさしかかる。用のなくなった侍女のアグラエは一足先にホテルに戻り、束の間とはいえ二人だけの時間が残される。一本の桜の枝に紙きれが結び付けられ風に揺られている様子を指して、案内人はその木のことを「恋人たちの木 (l'arbre des amoureux)」(p. 187) と説明する<sup>20</sup>。枝に紙を結び付けるのには親指と薬指のみを使わなければならず、結び目がほどけて紙が飛んでしまえば、恋は長続きしないが、枝に残り続ければ恋人たちは幸福になる、というものである。エリックもグロリアも、生来器用なため、また成

功したいと願っている甲斐もあって、紙きれを枝に首尾よく結び付けることができる。恋の成就の予兆であり、またその指の動きはやがて睦みあう愛撫を象徴してもいる。かくして、神殿での神秘的儀式に次いで「庶民の迷信もまた彼らの恋を聖別した (la superstition populaire, elle aussi, venait de consacrer leur amour)」(p. 188) ことが記される。

宿で待っていた夫に寺詣での感想を聞かれ、グロリアは「ええ、忘れがたいものだったわ (Oui, inoubliable)」(p. 188) と答える。それは単に「寺が本当に素晴らしかったのだ Cette pagode était vraiment une chose extraordinaire」(p. 188) と言っているように見えて、実は別の意味を含んでいることが、「青年に向けられたそのまなざしはその言葉の意味を照らし出していた (son regard, en se tournant vers le jeune homme, éclairait le sens de ce mots)」(p. 188) という記述からうかがい知ることができる。一行は翌朝の汽車で東京を目指すことになるが、この日光の地が、二人の愛の進展に決定的な役割を果たしているのは明白であるといえよう。

### 3-3. 東京

東京は近代的なヨーロッパの都市のようであり、一行の気に入るものではない。電動の路面電車が走り、ホテルの中で日本的なものといったら主の着物のみであり、お茶のひとつも、色とりどりの着物を着た娘たちによって振舞われるのでなければ、まるでオペラ座横の大通りのそれと何ら変わるところがないものとして描かれる。

ホテルでエリックは電報を受け取り、翌朝には北京に発たなければならなくなったことを夫妻に告げる。これはグロリアにとってもリンデンフェルス公にとっても残念な別れであり、一行は互いの別れを惜しむ。もともとあてがわれた部屋が気に入らなかったリンデンフェルス公がホテルの支配人と話している隙に、グロリアはエリックに小声でささやき、最後の夜の約束がひそかに交わされる。

Gloria, s'était rapprochée d'Éric, et d'une voix basse, ardente :

— Ce soir, quand Charles-Auguste dormira... chez vous.

— Gloria, que dites-vous ? quelle folie !

— Crois-tu que je te laisserai partir ainsi ?... Je veux de toi toute la joie... je veux, tu entends ?

— Gloria !... Ah ! nous sommes fous tous les deux.

— Ce soir !... (p. 190)

グロリアはエリックに近寄り、低く、しかし熱を帯びた声で言った。

「今夜、シャルル＝オーギュストが眠ったら…貴方の部屋に。」

「グロリア、貴女は何を言うのですか、なんという狂気。」

「こんな風に貴方を発たせるわけには行かないわ。すべての喜びを捧げたいの。それが私

の願いよ。わかる？」

「グロリア…ああ、僕たちは二人とも気が狂っている。」

「今夜…。」

京都と日光のくだりがなければ、この会話は単なる有閑夫人による誘惑の場面のそれとしてしか理解されないであろう。しかし、いささか冗長で一見煩瑣に過ぎるように思われる京都と日光での出来事によって浄化され赦された二人の恋はまた、霊的な結びつきが神によって先に保証されているがゆえに、単なるメロドラマの台詞とは一線を画すことになる。恋の炎に身を灼かれているのは二人とも同じであるが、その恋をエリックは「狂気」と形容している。エリックのこの発言から、この恋模様が、日本という背景と密接に絡み合いながら、それでも『トリスタンとイゾルデ』に代表されるような西洋伝統の恋物語の結構を保っていることが分かる。

かくして上に見たように二人は結ばれるが、その詳細が物語の中で語られることはない。次章ではすでにエリックは旅立っており、脱力状態に陥ったグロリアは、夫に導かれるがままに東京観光に同道する。夫は「珍しいものから珍しいものへ (de curiosités en curiosités)」 (p. 192) ある意味健全な好奇心に駆られて東京観光を続け、妻を連れ回すが、妻は失われた至福の時の追憶に没頭している。

Elle lui suivait où il la menait, docile et passive, mal éveillée de son rêve, dont elle traînait encore après soi quelques lambeaux radieux, et tâchant de prolonger le plus possible cet état intermédiaire entre la vie réelle et le songe, pour conserver quelque chose de son bonheur envolé. (p. 194)

彼女は大人しく、されるがまま、夢からさめやらぬ様子で夫の導くところに付き従った。彼女はまだ夢の輝かしい残滓を引きずっていて、現実の生活と夢想の間の状態を可能な限り引き延ばそうと努め、飛び去ってしまった幸福の何がしかを保ちたいと思っていた。

妻を伴っての観光であるにもかかわらず、夫は吉原を訪れることができなかったことを残念がる。吉原は二人が訪れるはずだった前日に大火で炎上していたのである<sup>21)</sup>。それでも妻はとくに抗議することもなく、夫に付き従う。

La jeune femme l'accompagnait partout, sans protester : elle était dans cet état d'indolence physique et d'intense vie intérieure où l'on accepte tout plutôt que de dire un mot ou de faire un geste qui rompt le charme de la rêverie douloureuse et suave où l'on s'abandonne. (p. 193)

若い女性 (=グロリア) は、抗議することなく夫に付いて行った。彼女は肉体的には無気力な状態にありながら、その内面では激しく生きていたのであって、今身をゆだねてい



る苦しくも甘い夢想の魔力を断つような言葉を漏らしたり振舞いに出たりするよりは、すべてを受け入れてしまいたい心境にあった。

グロリアにとってすべては、まるで「禁じられた美味なる杯(une coupe délicieuse et défendue)」(p. 193)を束の間口にしたように味わった愛を思い起こさせるものとして作用しているのである。四十七士の墓を訪れた際には、グロリアは満開の桜吹雪に手をかざし、たくさんの花卉をその手中に収める。その花卉はグロリアにとって、「恋する女の数え切れないほどの軽快な喜びのすべて(toutes ses joies innombrables et légères d'amoureuses)」(p. 194)を表しているように思えるのである。大仏を見るために訪れた鎌倉では、グロリアは大仏の姿に、あの聖なる鏡の前で神官に感じたのと「同じ目を見張るような尊敬の念(le même respect émerveillé)」(p. 194)を覚える。かくしてすべては、今は失われた愛の追憶につながって行くのである。

### 3-4. 奈良

この後夫妻は奈良を訪れるが、そこでグロリアをとらえるのは、京都での聖なる結びつきに連なる思い出である。大仏殿は改修中<sup>22)</sup>であり、参拝者は皆記名して板や煉瓦を寄進するきまりになっていたが、グロリアは署名を拒否する。過日京都でエリックが、聖なる鳥居の小さな柱に二人の名前を記した日のことを思い出していたからである。失われたエリックとの思い出の中での結びつきが深まれば深まるほど、夫の存在は疎ましいものになる。何の気なしに夫が音を立てて煉瓦を落としてしまうと、それが妻には、「自分の心の上に落ちて心をうち砕いて(elle (=la brique) lui retombait sur le cœur)」(p. 195)しまうかのように感じられるのである。満開の桜を見たグロリアは、エリックが愛の象徴である紙切れを結び付けた京都の桜を思い出す。その想いはまず、「あの紙切れは未だあそこにあるのかしら。果樹園のかよわい花を散らしてしまう乱暴な風が、すでにあの紙切れをどこかに飛ばしてしまったのではないかしら(Y était-il encore ? Le souffles violents qui saccageaient la floraison fragile des vergers ne l'avaient-ils point emporté déjà ?)」(p. 195)と自由間接話法によって示される。そして自らの運命を「孤独のうちに風に翻弄される薄葉のそれのように(celle de la feuille légère livrée aux jeux du vent dans la solitude)」(p. 195)だとグロリアが感じているさまが語られる。

公園に灯りがともると、夫は「私たちが照らす蛍に伴われて、こうして散歩するのは素敵なことだね(c'est charmant de se promener ainsi, avec cette escorte de lucioles qui nous éclaire ?)」(p. 196)とあって口づけを求めるが、妻は神経質に身をかわず。妻が夢見ているのは「あの楽園の一夜(cette nuit de paradis)」(p. 196)だからである。

### 3-5. 宮島

夫妻が日本滞在の最後に訪れるのは、これもまた聖地であり、「日本の真珠(*la perle du Japon*)」(p. 196)とも呼ばれる宮島である。宮島への道のりは困難で遠いにもかかわらず、中国に渡る前に是非とも宮島を訪れたいと主張したのは夫のリンデンフェルス公であり、それは、この地を訪問することによって夫妻の旅行を独創的で比類なきものにするためである。というのも、「真の付和雷同の輩(*vrais moutons de Panurge*)」(p. 196)たる大半の旅行者は、「夢のオアシス(*cette oasis de songe*)」(p. 196)でありながらこれほどまでに到達しにくい宮島までは、決して行こうとはしないだろうからである。結局ある種の夫の俗物らしい虚栄心を満たすためのこの旅行にも、妻は黙って付き従っている。

宮島に渡るために夫妻は奈良から神戸に至るが、「日本到着前からの諍いを経て、エリックと和解した(*après leur brouille elle s'était réconciliée avec Éric*)」(p. 196)かの地でグロリアが抱くのは「悲しくも甘い感動(*une émotion triste et douce*)」(p. 196)である。これに続く自由間接話法<sup>23)</sup>は、グロリアの苦い追憶を物語っている。

Comme ils avaient été enfants, tous les deux, de se disputer, de se boudier pendant les précieuses journées que le ciel leur accordait pour s'aimer ! S'ils avaient su !... Comme ils se seraient gardés de gaspiller ces instants de grâce en futiles querelles ! Mais à ce moment-là ils ignoraient à quel point ils s'adoraient. (pp. 196-197)

私たちは何と子どもだったことでしょう。天が私たちに愛し合うために恵みたまうた貴重な日々の間、お互いに喧嘩したりすねたりしていたなんて。あの恩寵の時を、取るに足らぬ諍いに虚しく費やすのを控えていたのならば。けれどあの時には、お互いにどれほど愛しく思っていたかまだ知らなかったのだから。

しかしこの神戸の地で夫妻に朗報がもたらされる。それは、リンデンフェルス公の弟が公使に任命され、エリック同様中国の一連の騒動の鎮圧<sup>24)</sup>のためにただちに北京に赴任するという知らせである。電報によれば、弟は既に北京に到着しているはずであり、夫妻は北京には当初は一週間程滞在する予定であったが、弟夫妻が出迎えてくれるのであれば、たっぷり一ヶ月は滞在できるだろうというのである。これは、「部屋着を着て鼠の尻尾をつけた黄色い猿ども(*des singes jaunes à queues de rat et en robes de chambre*)」(p. 198)に辟易し始めていたリンデンフェルス公にとっては、弟夫妻と共にドイツという祖国を再発見する好ましい機会であるが、グロリアにとっては、エリックのいる北京に一ヶ月滞在できるという機会なのであり、そのためグロリアは「恋する女の魂がそのまま甦る(*toute son âme d'amoureuse qui ressuscite*)」(p. 198)を感じる。

したがって宮島は、グロリアが追憶に浸るばかりだった奈良とは異なり、再会への期待と恋心の再燃によって、その霊性が前面に押し出された光景として描写されることになる。

*l'île sacrée où il est défendu de naître et de mourir, car rien de ce qui rappelle les vicissitudes de l'existence éphémère des hommes ne doit se produire sur cette terre, dédiée toute à la divinité. Dès qu'une femme approche du terme douloureux, on la conduit de l'autre côté du détroit ; dès qu'un vieillard ou un malade commence à se marquer des signes précurseurs de la mort, on lui faire repasser ce bras de mer qui rappelle ainsi l'Acheron, le fleuve des trépassés. (pp. 198-199)*

この島は、そこで生まれたり死んだりすることも禁じられた聖なる島である。というのも、人間というはかない存在の浮沈を思い起こさせるものは何ものも、すべてが神に捧げられたこの地に起きてはならないからである。臨終の苦悶の近づいた女は、対岸に運んで行かれる。年寄りや病人が死の前兆を示すと、やはりこの死者の渡るアケロン川を思わせるこの海を渡らせるのである<sup>25)</sup>。

宮島を訪れるために神戸から乗った汽車の中で夫妻が目当たりにする日本人の光景は、それまでの、観光案内書の記述を拠り所とする外面的な記述というよりは、実際にかの地を訪れ、当時の日本人の暮らしぶりを目当たりにした者でなければ不可能ではないかと思われる描写に満ちている。それは、「アラブ風に立膝を立てて座った男や正座してすっかり丸まったようになっている小さな女たち (Les hommes étaient assis en tailleur, à la manière arabe ; les femmes, toutes menuës, accroupies sur leurs talons)」(p. 199)であったり、「梅や肉の切れ端、砂糖漬けの果物などが混ざったご飯で、彼らはそれを棒きれを使って器用に食べている (du riz où se trouvaient mêlés des pruneaux, des morceaux de viandes, des fruits confits, qu'il mangeaient avec dextérité à l'aide de leurs bâtonnets)」(p. 199)という弁当の様子であったりする。このあと車掌がそれぞれの乗客に「室内履き (une paire de babouches)」(p. 200)を配って回るのも、当時実際にあった習慣であったものと思われるが、グロリアはこれをおぞましいものとして遠ざけている。この列車内の光景は、これまで見てきた神聖なる京都や日光の記述とは異なり、俗なる日本の描写として機能しているのであって、この「室内履き」のくだりも、日光の神域において不浄なるものを持ちこまぬために靴を脱がされた記憶と対照をなすものである<sup>26)</sup>。

グロリアがこのように日本の現地の人々の日常生活を目の当たりにしたのは、これが初めてのことであり、それまで日本人々は、グロリアにとっては宗教的儀式を執り行うか土産物屋で取引をする商人のみだったのであるが、このように人々の私的な生活習慣に触れることによって、グロリアは「不思議の国の中で、非現実のなんらかの祭祀 (quelque fête irréaliste dans un monde étrange)」(p. 204)を経験しているような感懐を覚える。第17章末尾の日本滞在の最後の

この場面において物語は中断され、恋のけだるさに耽溺したグロリアの精神が、幻の混乱の中、記憶の中でジュディット・ゴーティエの「詩」が呟くのを感ず、以下その引用で突如幕を下ろす。

« La lune monte vers le cœur du ciel nocturne et s'y repose amoureusement.

« Sur le lac lentement remué, la brise du soir passe, passe et repasse en baisant l'eau heureuse.

« Oh ! quel accord serein résulte de l'union des choses qui sont faites pour s'unir !

« Mais les choses qui sont faites pour s'unir s'unissent rarement ! » (p. 204)<sup>27)</sup>

「月が暗い空の只中に上り、そこで優しく憩っている。」

「ゆっくりと波立つ湖の上を夜の風が過ぎる、幸福な水に口づけしながら、行きつ戻りつする。」

「おお、一緒になるために作られたことどもの結合からもたらされる、なんと静かな調和よ。」

「けれど一緒になるために作られたことどもが一緒になることは、ごく稀にしかない。」

これらの引用は、エリックとの再会が確かなものとなって穏やかになったグロリアの心境を物語っているのと同時に、この恋が悲恋に終わる結末を暗示している。次の第17章は夫妻の北京到着から始まり、確かにグロリアはエリックと再会を果たし、逢瀬を重ねる仲となるが、それはやがて夫の知るところとなる。夫は妻を追放し、職を辞したエリックはグロリアとともにヨーロッパに戻るが、夫は妻とは決して離婚しないことによって二人に復讐を誓う。二人はシチリアのグロリアの代母のもとに身を寄せるが、やがて経済的窮乏と社交界における名声の失墜に耐えられなくなったグロリアの様子を見て、エリックはひとり立ち去る。最終章は華やかな社交界にきらびやかに君臨するグロリアと、飛行機の操縦士となったエリックとの再会、そしてその事故死で終わる。第17章から最終章に至るこの物語の後半において、日本での出来事やその思い出が語られることは絶えてないが、日本を描いた場面で予告された運命は、物語の最後までにすべて物語上の現実のものとなっている。これまで見てきたことを考え合わせれば、この小説の結構において、「日本」なるものが極めて重要な役割を果たしていることは明白である。

## おわりに

これまで見たように、ジュイレンの『最期の抱擁』においては、さまざまな日本に関する記述が物語の展開に重要な役割を果たしているのが分かる。そしてそれらの記述が、ハーンやチェンバレンなどの、主に英語で書かれた同時代の日本に関する著作を参照していることはまぎれなく、その点はポール・リヴェルスダール名で発表された『二重の存在』や『根付』と

も共通する特徴であるといえる。しかし、『二重の存在』や『根付』がもっぱら書物からの引用のみによっているのではないかと思われるのに対して、この小説は、そこに独自の解釈や見解が加えられた上に、現地を訪れてさまざまな事象を目の当たりにしなければ不可能なのではないかと思われるような、詳細かつ視覚的あるいは聴覚的な記述が随所に鏤められているのも特徴的である。また、『二重の存在』では、日本に関する記述は、日本に滞在した経験があり、日本の文化について深い教養のあるアメリカの女性詩人ヴィヴィアン・リンゼイという、物語においてはいわば外部にある存在によってもっぱらもたらされるが、『最期の抱擁』においては、それは地の語りの文によってもたらされる。さらに、日本に関する記述は、『二重の存在』においてはしばしば、単なる装飾的なエピソードとして機能しているように思われるが、『最期の抱擁』においては、物語の進展、とりわけその中心となる二人の恋の展開にとって必要不可欠な要素となっていることが分かる。また、『最期の抱擁』においては、そのような日本の記述が、その精神性や宗教性の解釈を含み、その実像から離れて、まったく新しい、いわば愛の宗教とでもいったものを物語の中で創り上げている様子も観察することが出来る。このことは、1910年代のヨーロッパ人による日本理解が、異国情緒を味わうのみの趣味的な段階を過ぎ、より深くその心性を理解し、解釈しようとする段階に達していることの証左でもあるといえるのではないだろうか。

## 注

- 1) エレーヌ・ド・ジュイレン・ド・ニーヴェルトについては、プレイヤード版コレット著作集第3巻のクロード・ピショワによるノート (Colette, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1991, pp. 1557-1558) またはジャン＝ポール・グージョンによるルネ・ヴィヴィアンの評伝 (Jean-Paul Goujon, *Tes blessures sont plus douces que leurs caresses, Vie de Renée Vivien*, Régine Deforges, 1986, pp.187-190) を参照のこと。
- 2) これまでの論考については、いずれも拙論「ルネ・ヴィヴィアンと日本—ベル・エポックにおける日本文化受容のひとつのあり方として①—」『富山大学人文学部紀要』第54号, 2011年, 「ルネ・ヴィヴィアンと日本—ベル・エポックにおける日本文化受容のひとつのあり方として②—」『富山大学人文学部紀要』第55号, 2011年, 「ルネ・ヴィヴィアンとラファディオ・ハーン—ポール・リヴェルスダール『二重の存在』における螢の表象をめぐって (1) —」『富山大学人文学部紀要』第56号, 2012年, およびルネ・ヴィヴィアンと日本の三人の女流詩人—ポール・リヴェルスダールの著作における小野小町・清少納言・加賀千代女の記述をめぐって—『富山大学人文学部紀要』第57号, 2012年を参照のこと。
- 3) 『二重の存在』において中心的役割を果たしていたロシア人については、この小説では全く言及がない。時代状況が如実に反映されているものと考えられる。
- 4) ドイツ人の貴族の夫という登場人物の設定にも、ジュイレンの出自が象徴されているように感じられる。また、そうではなくとも、出自が同じ階級でなければ分からないような精神構造や行動原理がこの小説には詳細に説明され、物語の進行を統御しているものといえる。
- 5) 『最期の抱擁』からの引用はすべて、*La Dernière Étreinte*, Alphonse Lemerre, 1912. より行ない、以

下頁数のみを記すことにする。

- 6) リンデンフェルス公はこの場面で、ゲーテの「ミニヨンの歌」の一節を「レモンの花咲く国 (*Das Land wo die Citronen blühen*)」とドイツ語で口ずさむ(小説中でリンデンフェルス公が時折口にするドイツ語は、すべてイタリック体で表記される)。この不釣り合いな結婚の動機が、妻の若さや美貌ばかりではなく、このようなドイツ人における南欧的なものへの憧れとも呼応したものであることが示唆されている。
- 7) この同じ場面でリンデンフェルス公が「結婚は狂気 (*le mariage est une folie*)」(p. 15)と形容していることも、物語の後の展開において予言めいた機能を果たしているものといえる。
- 8) この物語には、物語と同時代の現実の出来事や流行していた事物が言及されている。このコダックというカメラの銘柄についても、当時ブローニー写真機が発売されて携帯型の写真機が個人に一気に普及して行った状況を反映しているものといえる。
- 9) この日本人の微笑についてのエリックの見解は、ラフカディオ・ハーンの日本人の微笑についての随筆を反映したものであるように思われる。Lafcadio Hearn, *Glimpses of unfamiliar Japan*, chapter 11, London, Macmillan, 1894. を参照のこと。
- 10) このホテルは、神戸で1908年に開業し「スエズ以東で最高のホテル」と称賛されたトーアホテルがモデルになっているものと考えられる。
- 11) これも当時現実に存在した京都の都ホテルのことであると思われる。
- 12) 生け花についてのこのような見解についても、ラフカディオ・ハーンの「(日本の専門家のみがその活け方を知っているような、花のただ一本の枝の言葉で表しようのない素晴らしさ) *the unspeakable loveliness of a solitary spray of blossoms arranged as only a Japanese expert knows how to arrange it*」という見解をなぞっているもののように思われる。Lafcadio Hearn, *Glimpses of unfamiliar Japan*, chapter 1, London, Macmillan, 1894. を参照のこと。
- 13) この時代の花見が本当にこのような性質のものであったのかについてはさらに調査・検討が必要である。
- 14) このような日本の庭園の記述についても、ハーン、アストンらの著作の影響があるものと考えられるが、必ずしもそれらを忠実に敷き写したものではないように思われる。どこまでが引用でどこまでがオリジナルな見解であるのか、今後の検討課題としたい。
- 15) おそらくこの聖地は、伏見稲荷大社の千本鳥居なのではないかと思われる。
- 16) この物語においては、京都をめぐる宗教的な記述においても日光のそれにおいても、神道は仏教と同一のものに見なされている。それは作者の日本の宗教についての理解不足によるものといえるのかもしれないが、重要なのはそれが非キリスト教的な、しかし宗教的な環境を二人の恋に与えているという点であり、その意味において構想された新たな宗教が愛を保証しているのだといえるかも知れない。
- 17) ちなみに、当時西洋人によく知られていたこのような観光地の記述は、チェンバレンらの『日本旅行者のためのハンドブック』(Basil Hall Chamberlaine, *A Hand Book for Travellers in Japan*, London, John Murray, 参照したのは1907年の第8版)にほぼ網羅されているが、この小説に描かれていることが必ずしも同書にそのまま説明されている訳ではなく、他の書物を参照したり、実際に訪れた人から取材した成果が小説には反映されているように思われる。
- 18) これは日光にある輪蔵または経蔵にあたるものであると考えられる。ただし、これを回した者は3年間の幸運に恵まれるというのは物語構成上の創作なのではないかと思われる。
- 19) 以下の儀式の記述についても、実際に当時このようなことが行なわれていたか否かについてはさらに調査を進める必要があるものと思われる。
- 20) これについても日本人の目にはおみくじを木の枝に結んだもののように思われるが、実際にこのような習慣があったのかもしれない。いずれにせよ、ここで示される様々な出来事が、すべて宗教的かつ象徴的な意味を帯びて恋するふたりの関係の進展に寄与しているのだといえることができるだろう。



- 21) この記述についても、1908年のいわゆる吉原炎上という史実を踏まえているように思われる。
- 22) これについても、1903年から大仏殿の明治の大修復が行なわれており、寄進するものはおそらく瓦であったと思われるが、いずれにしても史実を踏まえてのものであると考えられる。
- 23) この小説の中で自由間接話法が用いられるのは、この上の奈良でのくんだりこの箇所のみであり、グロリアの心情に語り心が寄せている様を観察することが出来る。
- 24) この中国での騒乱がどの史実を踏まえているかについては、今のところ不明である。当時中国は清朝の末期にあり、どの局面もある種の騒乱状態だったと言ってもいいのかも知れない。のちのリンデンフェルス公の弟やエリックの行動、エリックとグロリアが乗馬の稽古を口実に情事を重ねるくんだりなど、特定の騒乱状態を背景としているというよりは、エリックとグロリアが情事を重ね、またその露見から両者の逐電に至る物語の展開を保証するための創作上の口実であるのかも知れない。
- 25) この点については、チェンバレンの前掲書 (*A Hand Book for Travellers in Japan*) の宮島のくだりに、英文で同様の説明がある (An ancient religions rule forbade all births and deaths on the island. Should a birth unexpectedly take place, it is still usual to send the woman away to the mainland for thirty days ; and though patients *in extremis* are no longer removed, all corpses are at once sent across the strait for interment at the village of Ono) (p. 414).
- 26) このような習慣が当時本当にあったのか否かについては、今後の調査の課題をしたい。
- 27) このジュディット・ゴージェのものとする「詩」は、その処女作で、ジュディット・ヴァルテールの名で出版された中国詩の翻訳集である『白玉詩書』(Judith Walter, *Le Livre de Jade*, Alphonse Lemerre, 1867) の、陶翰の作であるとする「若い詩人が川の対岸に住む恋人を思う詩 (Un jeune poète pense à sa bien aimée, qui habite de l'autre côté du fleuve)」である。ジュイレンおよびヴィヴィアン、またポール・リヴェルスダールの作品の中でジュディット・ゴージェの名が挙げられるのはこれが初めてである。また、ジュディット・ゴージェといえば、日本の和歌の訳詩集である『蜻蛉集』(Judith Gautier, *Poèmes de la Libellule*, Gillot, 1885) が名高いが、ここでは中国訳詩集のひとつが採用されている。その理由として考えられるのは、詩の内容が二人の恋の行方を予言するようなものであり、次章以降の転落の物語が、まさしくその中国で展開して行くことになるためなのではないだろうか。

本論文は、科学研究費補助金の助成を受けた研究（課題番号 24520343）の成果の一部である。